

第5章 第3回ユースオリンピック冬季競技大会（2020/ローザンヌ）

視察報告

－環境保護に関する対策・活動を中心に－

石塚 創也¹⁾

1. はじめに

筆者は、ローザンヌ（スイス）で開催された第23回ユースオリンピック冬季競技大会（以下、「ローザンヌ冬季YOG」と省略する）の視察を行った（2020年1月9日～12日）。本稿はその報告を行うものである。

ローザンヌ冬季YOGは2020年1月9日に開幕し、14日間の日程で開催された。ローザンヌが開催都市に決定したのは、2015年7月にマレーシアで開催された第128回国際オリンピック委員会（以下、「IOC」と省略する）総会であった。ちなみに、このIOC総会では、2022年に開催される第24回オリンピック冬季競技大会の開催地が中国の北京に決定された。

オリンピック冬季競技大会（以下、「冬季大会」と省略する）は、1924年にフランスのシャモニーから始まった。その後、1940年の札幌、1944年のコルチナ・ダンベッツォ（イタリア）の中止を挟んだものの、2022年で24回を数えることになる。また冬季大会は、オリンピック競技大会（以下、「夏季大会」と省略する）同様、原則1オリンピックアード（4年）に一度開催されているが、1992年にアルベールビル（フランス）大会の後、2年後の1994年にリレハンメル（ノルウェー）で開催され、夏季大会開催年の中間年に開催されるようになった。

その後、2010年からは、ユースオリンピック競技大会（以下、「YOG」と省略する）が開催されるようになる。2012年からは、ユースオリンピック冬季競技大会（以下、「冬季YOG」と省略する）も開催されるようになり、2012年にはインスブルック（オーストリア）、2016年にはリレハンメル（ノルウェー）で開催されている。

YOGは、14歳から18歳のアスリートを対象とした、通常のオリンピック以上に教育的活動を重視する大会として始まった。YOGには、勝敗の結果のみに着目するのではなく、スポーツを通じて人生や社会に対し、幅広く知識や関心を得られるような仕組みがある。YOG開設当初には、選手が文化・教育プログラム（CEP・Learn & Share）に参加することや、開会式から閉会式まで全日程滞在し、多様な選手と交流することが義務付けられていた。しかし、現在はその義務はなくなってしまったため、「単なるオリンピックの縮小版」と揶揄されることも少なくない。とはいえ、競技場や、選手村、市街地には様々な文化・教育プログラムが散見されており、開設当初の理念は少なくとも継承されているといえよう。

以上を踏まえ、本章では、ローザンヌ冬季YOGにおける環境保護に関する対策および活動に焦点を当て、視察報告を行う。

2. ローザンヌ冬季YOGにおける開会式・競技会場

ローザンヌ冬季YOGの競技会場は、ローザンヌ市を中心に、8エリアに分散されている（図1）¹⁾。筆者は、そのうち下記2エリアの視察を行った。

○LAUSANNE

- ・ VAUDOISE ARENA
開会式、アイスホッケー
- ・ MEDAL PRAZA
表彰式

○LES DIABLERETS

- ・ ALPINE CENTRE
アルペンスキー

1) 日本スポーツ協会 スポーツ科学研究室

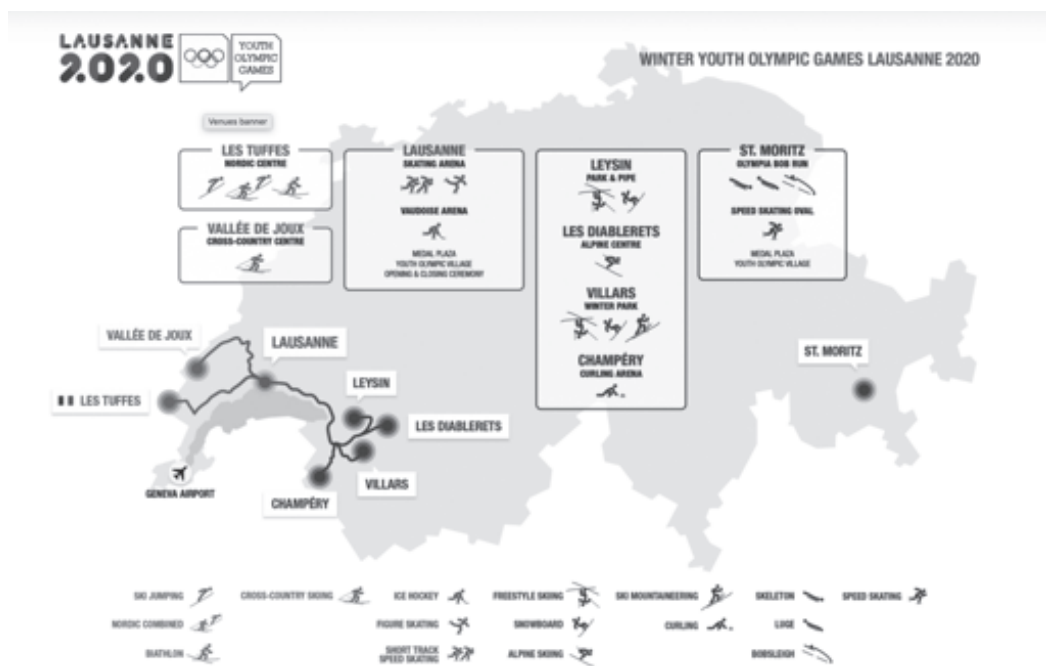


図1 ローザンヌ冬季YOG会場分布図

1) LAUSANNE

①開会式

開会式では、選手の入場行進のほか、ダンス、パフォーマンス、芸術作品制作の実演、子供によ

るオリンピック賛歌の合唱など、様々なコンテンツが催された（写真1－3）。環境保護をテーマにしたパフォーマンス等は行われなかったが、最近建て替えられたIOC本部「Olympic House」の



写真1

紹介がなされ、また開会演説では「持続可能性の推進」に触れられていた。1990年代以降、IOCや各大会組織委員会は、環境保護に関する活動やパ



写真2



写真3

フォーマンスなどを行い、「地球にやさしいオリンピック」をアピールしてきた。しかし最近では、環境保護活動についてはスポーツ界が当然行うべきものであり、「持続可能性」の要素の一つとして捉えられているため、特にアピールすることはなくなったと考えてよいだろう。実際、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会においても、「持続可能性」を重視することは掲げているが、「環境保護」前面に出している訳ではなく、多様性の尊重や、組織間におけるパートナーシップの重要性等と同等に重視していることがわかる²⁾。

②アイスホッケー

アイスホッケー競技においては、筆者が視察した日程では3 on 3（3人対3人）で実施する種目が行われていた。ルールは正式なものよりも簡略化され、かつ競技実施時間が短縮されていることから、マスメディアへの露出や競技人口増加のための取り組みの一端と考える（写真4）。

競技場の照明にはLEDが用いられており、電力使用量が削減されていると考えられる。なお、この競技場は、プロアイスホッケーチームのホームリンクであり、老朽化によりローザンヌ冬季YOGの前に改修された（写真5）。

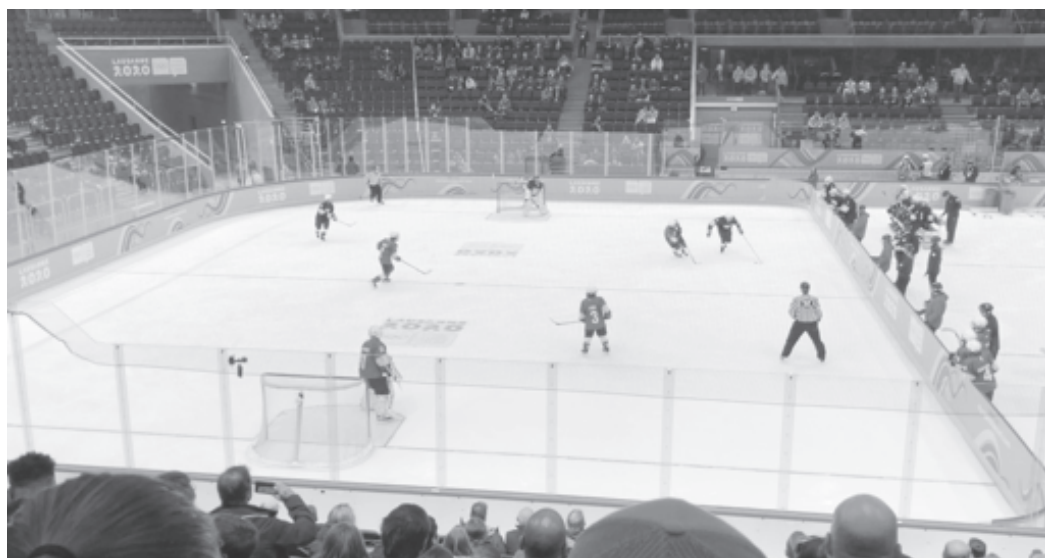


写真4

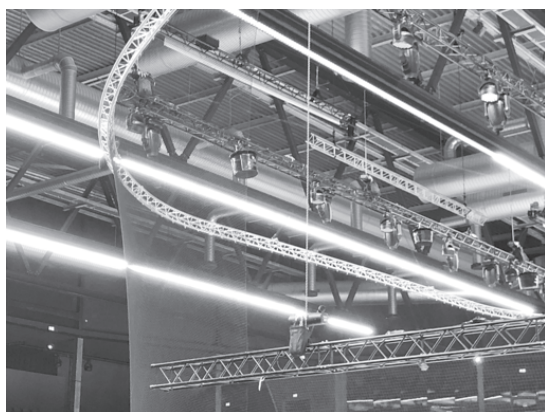


写真5



写真6

競技場内で販売されているドリンクのカップは再使用（リユース）できるものが用いられていた。なお、再使用を促す仕組みとして、ドリンク購入時にデポジットを支払い、コップを返却する際に返金を受けるシステムが採用されていた（写真6）。

2) LES DIABLERETS

スキー会場においては、筆者が視察を実施した日程ではアルペン複合種目のスラロームが実施されていた（写真7）。

会場内には、至る所にゴミ箱が設置され、分別を促す表示がなされていた（写真8）。

3) その他

ローザンヌ市内には、至る所にゴミ箱が設置さ



写真7



写真8



写真9

れており、分別を促す表示がなされていた（写真9、10）。余談だが、ゴミ箱の付近には灰皿が設置されていた。「タバコの無いオリンピック」を掲げているはずのIOCは、この状況についてどのように考えているのだろうか。

IOCの公用車には、原則排気ガスを出さない電



写真10



写真11

気自動車が採用されていた（写真11）。

文化・教育プログラムの一つとして、“氷を使わない”スケートリンクが設置され、子供達が元気に滑走していた（写真12）。通常のスケートリンクには冷凍機が必要であるが、樹脂に特殊なワックスを付着させることにより滑走が可能になる。スポーツ体験と持続可能性を体現できる取り組みの一つといってもよいだろう。



写真12

おわりに

この度の視察により、開会式において環境保護に関するパフォーマンス等はなされなかったものの、競技場や市内におけるゴミの分別の徹底、電力消費量の削減、再利用できる食器の採用、電気自動車の活用など、可能な範囲で環境保護のための対策を行っていることが明らかになった。

社会におけるスポーツの価値を高めていくためには、必ずしも環境保護に関する活動や対策についてパフォーマンス等において全面的にアピールする必要はないと考える。とはいえ、可能な範囲で対策を講じるとともに、文化・教育プログラム等における啓発活動を継続することによって、スポーツに関わる一人ひとりが環境保護の重要性・必要性を認識できるような仕組みを構築することが求められるだろう。

参考資料

- 1) <https://www.lausanne2020.sport/en/venues>
- 2) <https://tokyo2020.org/jp/games/sustainability/>